

ネロポリス 上

ネロの時代の物語

ユベール・モンテイエ

羽林 泰 訳





ネロポリス 上

ネロの時代の物語

ユベール・モンティエ

羽林 泰 訳

中央公論社

NEROPOLIS de Hubert Monteilhet
Copyright © 1984 by Editions Julliard
Japanese translation rights arranged with
Editions Julliard through Japan UNI Agency, Inc.
Japanese edition © 1988 by Chuokoron-Sha, Inc.

ユベール・モンティエ

ネロポリス (上) ネロの時代の物語 ©1988 定価2300円
昭和63年4月15日印刷 昭和63年4月25日発行 検印廃止
訳者 羽林 泰 発行者 嶋中 鵬二
印刷所 三晃印刷 製本所 小泉製本

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替東京2-34

ISBN4-12-001670-6

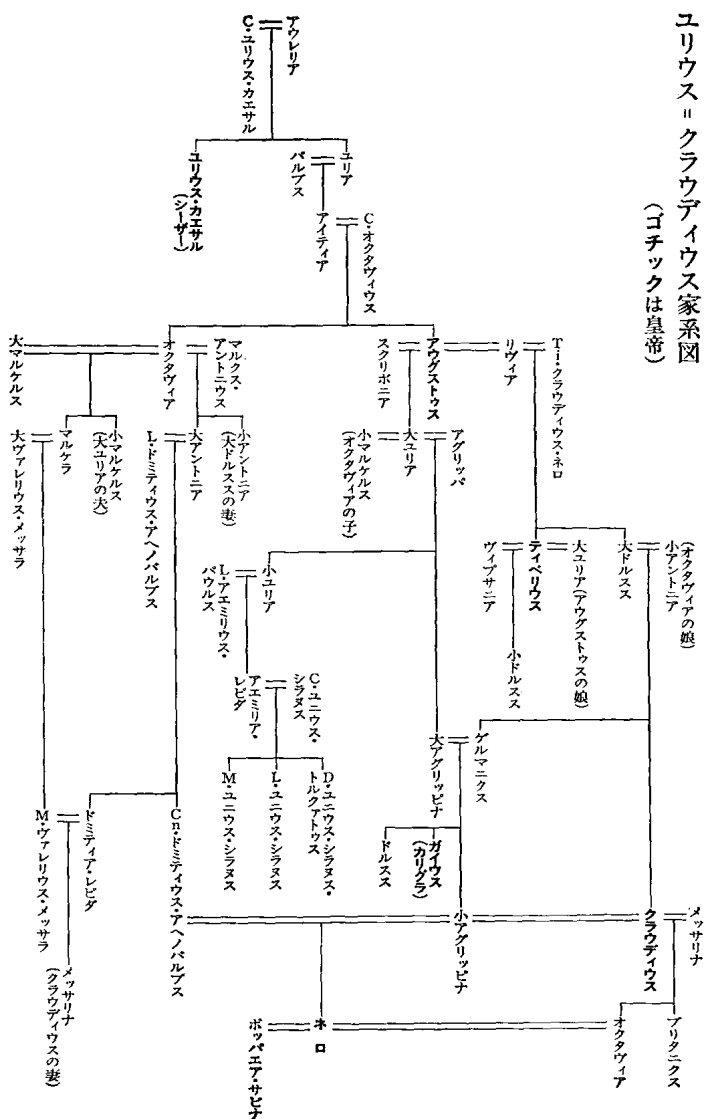
ネロ・ポリス 上

——ネロの時代の物語

世界の帝国をことごとく呑み込み、世界に冠たる諸王国を生み出した
この偉大なる帝国。われわれが今なおその法を守り、したがって他の
いかなる帝国にもまして知らねばならない偉大なる帝国

——ボッシュエ

(ゴチツクは皇帝)



第一部

元老院議員アポニウスの着付師は主人にトガを着せるのに手間どっていた。腰回りの帯バルタラスを解いては締め直し、手下げ袋の代わりになるトガの垂れ下がった髪を整え、その半円形の直径に当たる幅広い紫色の帯飾りが正しい位置にきて、アイロンを掛けたばかりの毛織物の白地にその高雅な色彩がよく映えるように気を配った。礼装用のトガは近頃大げさな意味をもつようになり、専門家の手を借りずに着ることなどもはや論外だった。アポニウスは秋の朝、日の出とともに起床したのに、理髪師がいらいらするほど入念に髪を結ったせいで、すっかり遅くなっていた。

不断ならこの時間にはまだいぎたなく眠っているか、熟れきった乳房を侍女たちに委ねて肌の手入れをさせているはずのポンポニアが化粧着姿で現われた。髪は乱れたまま、不安な様子だった。悪い夢を見たのだ。再婚した当初、毎夜のように見た夢と同じ夢だった。十年ほど前の、アポニウスが危うくテイベリウス帝の寵臣で野心家のセイアヌスの不興を買いそうになった頃のことだ。驚に変身した夫がローマの上空を勇壮に旋回したかと思うと、突然宮殿の裏庭に落下し、下僕たちがとびかかって取り押さえ、羽をむしり、肉を串刺しにしたのだ。アポニウスは驚とは似ても似つかぬ性格だけに、恐ろしい夢だった。

アポニウスは肩をすくめて見せた。左肩はトガで覆われており、右肩は、まだ経験していないが重要な演説をする際に腕を自由に動かせるようになってあった。彼は自由思想家を気取ったこともないし、前

兆や夢を無視するほど大胆でも不敬でもない。もしカエサルが四人目の妻カルプルニアの言葉に耳を傾けていたら、三月十五日の暗殺を免れていただろう。とはいえ、記憶の限り、剣闘士の競売で買い手が不幸に見舞われたことはなかった。

「ふつうの競売とはわけが違いますわ、マルクス。とても奇妙ですもの」

「奇妙だろうと異常だろうと、わたしは大丈夫だ」

「カリグラはなぜそんなに大勢のユリアニを売りに出すのでしょうか？」

皇帝所有の剣闘士であるユリアニたちはローマだけでなくイタリアや属州の諸都市でも高い地位を得て、カエサル家への所属を連想させるこの呼称を鼻にかけていた。

答えは明らかだった。

「現皇帝ガイウス（カリグラ）はティベリウス帝の財産を使い果たしてしまった。そこでなんとかして財源をつくり出さねばならず、即位以来民衆に提供してきた見世物の余りものを処分することになったのだ」

「でも剣闘士については、ガイウスはこれまで売る側ではなく買う側だったではありませんか」

「彼は剣闘技に熱中して剣闘士の数をむやみにふやしすぎたので、今日はそれを減らそうというわけさ」

「売りに出したところで、関心を示すのはイタリアや属州の剣闘士頭のような、剣闘士の売買を仕事にしている人たちだけではないかしら。どうして元老院議員を、それもそんなに大勢招待するのでしょうか？」

「近頃は皇帝が自分で、あるいは寵臣を通じてローマの平民のために競技会を催すだけではないのだ。多くの元老院議員はローマの外に重要な友人や被護民を抱えていて、地方議会の機嫌をとって選挙を有利にするために彼らに見世物を催させる。そういう連中に剣闘士を何人かたで供給してやれば喜ぶか

らな」

「あなたにはローマ人の被護民なんて一人もいないではありませんか」

「だから自分の腹は痛まないわけだ。出かけて損はないさ」

「剣闘士の競売に皇帝が出席するなんて聞いたことがありませんわ。しかも名誉ある買い手でも、人気取りのために剣闘技の見世物を催すムネラリウス（原注。「ムネラリウス」と仮称される公人または私人が、民衆に提供する見世物を「ムネス（贈物）」と呼んだ）でもなく、自分の剣闘士ファミリア（一家の奉公人全体）を売りさばく商人になり下がるとは。そんな恥ずべき役は兵舎にいる皇帝の解放奴隷か下っ端剣闘士頭のすることです」

もっともな意見だった。剣闘士の売買は売春斡旋と同等の行為と見なされていた。娼婦や稚児を取引きする売春仲介人の商売は円形闘技場の御用商人である剣闘士頭のそれと似ており、その名称は同じ「ラニウス」という語源をもつといわれる。たしかにエリート集団ユリアニの管理と訓練を受け持つ剣闘士頭は、その役割の重要性和皇室との結びつきのゆえに最悪の侮蔑は免れていた。だが剣闘士頭や売春仲介人の一人として、墓にもっともらしい、もしくは贅辞めいた碑文を刻まれた者はいない。彼らを雇う皇帝や、彼らのサービスを必要とする民衆や、また自らの武勇によって汚名をそぐことのできる剣闘士自身はそれでよかった。しかし剣闘士からも売春仲介人からもそれほど勇敢な行為と見なし得られない娼婦や稚児の汚辱は共同浴場で洗い流すほかない。こんな矛盾した話があるうか。

そう、たしかにポンポニアの言うとおりだ……。だがカリグラは病気で正気を失って以来、どんな不品行も意に介さなくなっていたのだ。着付師さえ聞き耳を立てていなかったら、アポニウスは妻にその話を聞かせてやるところだった。

アポニウスは高官の職を顯示する赤革に金色の留金のついた派手な編上靴をはかせるために腰を下ろしながら、カリグラがなにをしでかすかわからない気紛れ屋であることを遠回しに言った。それがカリグラの弱みだった。ローマはその他の蛮行や放蕩や不品行なら認めるだけの余裕があった。だがカリグ

ラの、とりわけ真面目な人々を狼狽させる奇行は、常軌を逸した論理から成り、冗談が混じって、予見しがたいものだった。彼は闘技用の猛獣に野生を思い出させるために生きた人間の肉を闘技の始まる前に味わわせるのがよいと言って、通常は闘技のためにとっておく普通法による死刑囚を餌として与えたことがある。これにはどんな動物学者でも反証できなかっただろう。なんとも薄気味の悪い奇行だ。

しかしアポニウスは驚でもライオンでもない。剣闘士の競売会に恐れるようなどんな残虐行為があるというのか。

着付師が靴紐を結んでいる間も、まだ気持の収まらぬポンポニアは夫に出かけるのを思い止まらせようと懸命だった。畏のような気がする、と彼女は言い張った。だが、どんな畏なのかは、もちろん彼女にもわからなかった。根拠のない、ただの虫の知らせではなんの役にも立たないのだ。

アポニウスは冗談を言って妻を安心させようとしたあとで、きっぱりと言った。「ガイウスが他の大勢の人間と同じようにわたしにも来いと命じたのだ。もし仮病でも使ったら、彼が無礼きわる不信任の証拠と見なすことはおまえも知ってるだろう。それこそなによりも確実な危険ではないか」

駕籠を担ぐ人足が表玄関柱廊の下に待機していた。行き帰りお供をさせるために呼び集めておいた被護民の一団も一緒だった。彼らを帰らせていたら、どんな顔をされただろうか。

アポニウスは引き止めようとするポンポニアを振り切って自宅を出た。理髪師と着付師ばかりか、妻にも貴重な時間をつぶされてしまった。競売はすでに始まっているに違いない。会場に着くのが遅すぎると、白い眼で見られはしまいか。中央の広間を通る際、大時計が第三時半を告げた。アポニウスは駕籠に乗り込む前にトガの襷の中から小型の日時計を取り出し、太陽に合わせて時刻を確かめた。太陽は雲一つない青空に高く輝いていた。

幸い、アトリウムの大時計は進んでいたらしい。

道中、高貴な風格のカエリウス丘の斜面を転がるようにして下ったかと思えば、すぐまたパラティヌ

ス丘を登るといふ具合で、駕籠の揺れるまま身を委ねたアポニウスはローマで時間を正確に守るのがいかにむずかしいかをつくづく思うのだった。目的地へ到着するのに都合のよい道を通っているのかどうか、心配だった。

この時代のローマでは、昼間は十二時間に分割されており、夜間もまた同じだった。そのため夏至から冬至まで昼夜の時間の長さは三十分以内の差で絶えず変動し、春分と秋分の日のみ、昼夜の時間が同じ長さになる。さらに曖昧なことに、常用日の二十四時間は夜の第六時から七時、つまり太陽が沈む時間を通り越して深夜から深夜までとして計算された。これは眠っている人のために、ある程度正確な時間がわかるようにするためである。正午は明確だが、深夜はきわめて曖昧だからだ。ギリシア人は——ユダヤ人も同じといわれる——もっと合理的で、日没から始まる天文学日を採用した。またバビロニア人は日の出を起点とした。

指針をもつ凹面日時計、ギリシアのグノモンは著しく普及していた。この道具に太陽が照らすことにより、盤上の一つの方角に一日の時間の長さを、別の方角に季節による太陽の高度が示された。しかしそれぞれの日時計が使用する場所の緯度に合わせて正確に作られ、入念に方向づけされていなければならない。アポニウスは、第一次カルタゴ戦争の緒戦においてカタナで奪取した日時計を誇らしげに民会前に設置したヴァレリウス・メッサラの有名な話を思い出しておかしくなった。それ以来三代にもわたってローマの時間は公式に誤ったままになっていたのである。

ついで水時計が普及した。これは夜間の時刻も表示する利点をもっている。ガラス製の円筒形容器から水が流れ出す仕掛けで、容器の表面の縦に月、横に時刻が記されている。アポニウスは回転時計さえもっていた。これは常に、その月の分割された時間に応じて流水の柱を表示するものだった。したがって少なくとも理論上は、時計は月の範囲内で時間の長短を制御し、変動を修正する必要がなかった。しかし実際にはそれぞれの時計を唯一正確な太陽を基とする近くの日時計に合わせて調節しなければなら

なかった。しかもその日時計にしても完全でなかったので、一層混乱をきたした。時刻を告げるために浮標と連動する銀の鈴によるカリヨンを鳴らしたり、羽で飾った人形に笛を吹かせたりしたが、それも空しく、ローマの時間は曖昧のままだった。

「時計同士を調整するよりは哲学者同士を調整するほうがまだしも易しい」とは言い得て妙である。

駕籠を揺すぶっていた国際色豊かな下層民の喧騒の声が急に止んだので、カーテンを開けてみると、故ティベリウス帝の新宮を取り囲む静かな敷地の中に入っていた。

群衆のざわめきでむせ返るような大広間では、まだ主のいない皇帝の椅子の前で競売人が脇役を演じる奴隷の団を無気力にさばいているところだった。副審判人、殺戮の間に区切りの音楽をつけるのを専門とするらっぱや角笛の奏者、競技会の主宰者と剣闘士と観衆の間をとりもつ伝令使や標識板係、介添人、マッサージ師、看護人、接骨医、撒水夫と掃除人、競走路雑役夫と担架手、惨殺された剣闘士の死体をスポリアトル（殺された剣闘士の衣服を剥ぎ取る者）の許へ運んでいくカロン（三途の川の渡し守り）かブルトン（地下の神）の扮装をした葬儀人夫、競技主宰者の合図により祝賀の信号を出す、神々の使者メルクリウスに扮した者……そして話題にも上らぬその他大勢。

アポニウスは立っている群衆をかき分けて舞台前に半円形を成す元老院議員席へ行った。

広間の壁には勝者に与える報賞を象徴するようにあざやかな緑色のシュロの枝と真紅のバラの冠が飾られ、商品が続々と登場する、やや高くなった舞台には闘技場のように一面砂が敷かれていた。舞台背後には剣闘士の崇敬する神々の像が恭しく細心の注意を払って立てられていた。ヘラクレスとマルス、幸運にも勝ち残った者が武器を奉納するヴェヌス、残忍無比の闘技を支配する、ネケシタスの娘にして罪の復讐者ネメシス。また反対側の広間の入口には商神ヘルメスの全身像が置かれていた。

悦に入る元老院議員のほかにも、剣闘技という特殊な世界の隠れた買い手がことごとく参集していた。野望に燃えた貴族が手当たりしだい犠牲にされる剣闘士の血によってローマの平民の票を集めるために

高値にせり上げた、熱狂的で忘れがたいあの共和政末期のカプア人大剣闘士頭。またローマでも、皇帝に属する機関との苛烈な競争にも耐えて生き残った独立の小剣闘士頭。さらにはイタリア全域と大部分の属州の剣闘士頭。剣闘技は多くの文明に共通する行事となり、範と仰ぐローマとの一体を象徴するものとなっていたからだ。とはいえ、剣闘士頭の仲介なしにイタリアや属州の都市で競技会を開催しようとする気前のよいムネナリウスも多数やって来ており、皇帝を崇拜する東方の祭司までもが彼ら「版」の結構な見世物を挙行して忠誠の証としていた。この競売は春から予定されていたのだ。

加えてカリグラを身近に見ようと集まった野次馬もいた。四頭立て二輪馬車が土埃を立てて疾走する大競走場カリス・マクシムスの熱狂と喧騒をパラティヌス丘の棧敷席から見下ろすカリグラに近づく術はなく、他の競走場、円形闘技場や劇場では衛兵たちにぎっしり固められて平民から隔離されていた。

アポニウスは太ったコルネリウス・コルドゥスと瘦せたカルビリウス・ルガの間によく席を見つけた。コルドゥスは財務官を辞したとき政治への関心を失い、もっぱら食い気だけだった。ルガは名誉執政官で、ストア主義を誇りとしており、見世物を軽蔑していた。六百人の元老院議員のうちアポニウスが名前を知っているのは百五十人だった。

開いた窓から下方に、パラティヌス丘に向かって上るヴィクトリア（勝利の女神）像の急坂の向こう側にカエサルガイウス・ユリウス・カエサルのフォルム（公議の行なわれる集会用の広場）とアウグストゥスのフォルムが見えた。それを見下ろすカピトリヌス丘は巨大な石船のようにどっしりと構え、その記念碑的な船首と船尾の間に平らな山間の谷が見えた。秋の暖い日射しを浴びた、永遠と伝統と安定の姿がそこにあった。

ほっとしたアポニウスは隣席の同僚と話を交わした。その間も競売は進んでいった。

目下「ティロ」を売りさばいているところだった。ローマ軍団の新兵を意味するティロが剣闘技の新人の呼称となった。命を落とすかもしれない初めての戦闘を待つ若者である。

これらの新参者の多くは、その境遇ゆえに得られない威信を剣闘技に求めようとする奴隷だった。だ

がごく少数ながら自由民や解放奴隷の中にも、金をもらって一定期間もしくは数試合、斡旋業者の手に自由を委ねる「アウクトラティオ」という独特の契約を結ぶ者がいた。この契約剣闘士は、賭博で文なしになり、財産を処分したあと、仕方なく自分を身売りした道楽息子であることが多かった。彼らの父親はよくこんなふうに警告したものだ。「そんなふしだらな暮らしを続けていたら、しまいに剣闘技をするようになっちまうぞ」。父親の言うとおりになったわけである。

剣闘士頭やムネラリウスは奴隷の身柄をそっくり買い取るほかにもアウクトラティオ契約も買い取った。競技会の見物客は当然ながら、自由民が娯楽の奉仕をすれば喜ぶので、競売で高値がつくのだ。

コルドゥスはもっとおもしろい競売でせり勝った話をアポニウスに聞かせた。「一昨日の早朝、トランステイベリム地区の魚市場で——玄人はヴェラブルム街の大きな魚市場をばかにしていた——熱心な愛好家集団から腕の長さほどもあるスズキを八千セステルティウスで買い取ったんだ。スズキと言ったかな？　ローマのスズキさ。釣人がカティロと呼ぶ魚で、ティベリス川の排水渠に住んでいる大食漢だね。だから『橋の間のスズキ』とも言うんだ。本物のカティロ、それもこんな大きな奴となると、値のつけようもない。インスの神官がキューベレの宦官みたいに脂が乗っていて、鹽の中で尾をびちびちさせて跳ねるんだ。きみに見せたかったな。新鮮さを保つために生きたまま念入りに仕込んだクルブイヨンで煮て、それを大きなヒメジの肝と、ルクリヌス湖のカキ、ウニの心臓、エビの団子の詰物と一緒にインド諸島米でつないだ最高のソースで味わったんだ。カティロの香りは絶品だよ」

食事に余計な金を使わないアポニウスは丁寧に合槌を打った。ストア主義者のほうを向くと、彼が質問をした。

「この会でわたしにはわからないことが一つある。もっとも、わたしはなににも知らないといっているがね……。剣闘士頭は買取り条件付き賃借契約を買い手のムネラリウスに提案したと聞いている。勝者は賃貸、死者や負傷者は現物売りという条件だ。だったら、ここに出席しているムネラリウスはなぜ現金